

六 主において喜びなさい

フィリピの信徒への手紙 四章二節―九節

二〇〇八年十二月十四日礼拝説教

秋吉隆雄 牧師

わたしたちは来週、二〇〇八年のクリスマス礼拝を捧げます。その一週間前の今日、わたしたちに与えられた御言葉はパウロが記したフィリピの信徒への手紙四章「主において喜びなさい、主は近い」という御言葉です。これはアドベントに最もふさわしい御言葉だと思います

今日はこの御言葉を中心に、フィリピ書から申し上げたいと思います。フィリピ教会はパウロがギリシャに渡り、ヨーロッパ伝道を始めて、最初に建てた教会であります。フィリピ教会はパウロへの深い信頼と愛を示し、パウロの伝道に惜しまない協力をした教会であります。フィリピ書の始めに、パウロはこのフィリピ教会のことを次のように書いています。「わたしはあなたがたのことを思い起す度に、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。」このような素晴らしい関係をパウロとフィリピ教会は保っていました。そのフィリピ教会も全く問題のない教会であったわけではありません。教会も人が集まるところですから、問題がありました。それをパウロは率直に書いています。今日の御言葉の四章二節と三節をご覧ください。「わたしはエボディアに勧め、またシンティケに勧めます。主において同じ思いを抱きなさい。なお、真実の協力者よ、あなたにもお願いします。この二人の婦人を支えてあげてください。二人は、命の書に名を記されているクレメンスや他の協力者たちと力を合わせて、福音のためにわたしと共に戦ってくれたのです。」フィリピ教会にエボディアとシンティケという二人の女性がいました。この二人の間にいさかいがありました。何が原因で喧嘩状態になったかは分かりません。パウロはその二人に対して、「主において同じ思いを抱きなさい」と仲直りを勧めています。そして、二人の婦人への勧めだけではなく、フィリピ教会全体に対しても「真実の協力者であるあなたがたにも二人の婦人を支えてくれるようにお願いします」と言っています。更に、この二人の婦人は仲たがいをしているけれども、神の手の中にある命の書に名を記されている人は天国に行けるわけですが、その命の書に名を記されているクレメンスや他の協力者たちと力を合わせて、この婦人たちも福

音のためわたしと共に戦ってくれたと言っています。二人の婦人は教会にとって、パウロにとって重要な働きをしてくれた人である。だから彼女たちを支えるようにして欲しい。パウロは二人に仲直りを勧め、またフィリピ教会全体にも率直に支えの協力を訴えています。

私はこの記述の中で二つのことを思います。エボディアとシンテイケという女性にはフィリピ教会の有力な女性信徒であつたでしょう。フィリピの町で家庭集會を開いていた女性ではないかと言われています。パウロはコリント書でこう書いています。「婦人たちは教会では黙っていなさい。婦人たちには語ることが許されていません。……婦人たちは従う者でありなさい。……婦人にとって教会の中で発言するのは、恥ずべきことです」。驚くような言葉を書いていますね。このフィリピ教会にも口が達者な有力な女性信徒がいたのではないのでしょうか。フィリピの町で最初にパウロの語る福音を受入れたのは、リディアという紫布を商う女性でありました。彼女は職業婦人です。ユダヤ社会では考えられない働く女性でした。フィリピ教会には教会を指導する活気ある女性信徒がいた。パウロはその女性たちによつて支えられていた。これが第一の点であります。教会はいつの世も女性信徒によつて大きく支えられていたと言えるでしょう。

もう一つ考えさせられることは、このフィリピ書は獄中のパウロに差し入れをしてくれたエパフロディトを送り返した時に彼に託した手紙であります。そしてこの手紙はフィリピ教会全員の前で読み上げられるわけです。エボディアとシンテイケも当然、この手紙を聞いています。手紙の中に自分たちの実名が入っている、しかも同じ思いを抱きなさいと仲直りが忠告されている。二人はこれを聞いた時、恥ずかしくはなかつたでしょうか。おそらく、パウロから名指しされても恥ずかしくはなかつたのでありましょう。パウロとフィリピ教会の間には、率直に物を言つてもお互いに受け入れ合う 開かれた信頼関係があつたのではないかと、私はそんなことを想像させられます。

ここから、パウロは喜びと平和の神について筆を進めていきます。四節から七節までをご覧ください。「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエス

によって守るでしょう。」フィリピ書の中で最も美しい聖句ではないでしょうか。

「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。」このフィリピ書は喜びの手紙と言われています。それはいたるところに喜び、喜べという言葉が書いてあるからです。確かにパウロにとって喜ぶべきことがありました。投獄されて不自由な身になっていた時に、フィリピ教会から贈り物と自分を手助けしてくれるエパフロディトが来てくれた。これは、パウロにとってフィリピ教会に感謝ですと喜ぶことであつたでしょう。反面パウロはこの投獄によって死刑になるかもしれないという恐れを持っていました。フィリピ書に「あなたがたがいけにえを捧げ、礼拝を行う際にたとえわたしの血が注がれるとしても」という言葉があります。祭壇にわたしの血がいけにえとして注がれる。殉教すると言っているわけです。殉教の死というのは決して喜ばしいことではないでしょう。パウロにとって今は、贈り物に対する喜びがあります。しかし反面、殉教の死という恐怖があります。ところが、パウロはそのどちらをも喜ぶと言っています。それをパウロは「主において」という言葉で語っています。「主において」はギリシヤ語で「エンキュリオ」と言います。また、「キリストにあつて」という言葉で「エンクリスト」という言葉も使っています。この「エンキュリオ」と「エンクリスト」という言葉だけで膨大な神学論文が書かれています。これらはパウロの信仰の鍵になる言葉であるからです。主において喜びなさい。キリストにあつて喜びなさい。パウロはイエス・キリストへの信仰における人格的な関わりの中でキリストにある喜び、主にある喜びを深く強く受け止めています。

「主イエス・キリストにあつて喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。」「広い心」というギリシヤ語の言葉の訳が難しいようです。結論的に言いますと、「決まりを越えて相手を受け入れる広い心」を指すようです。姦淫の女性が公衆の面前に引き出されて、「このような女はモーセの律法によれば石で打ち殺せとあります。あなたは、イエス・キリストは、この女をどうしますか」と迫られました。イエス・キリストは、「罪を犯したことはない者が、まず、この女に石を投げなさい」と答えました。すると老人から始まつて一人ずつ立ち去つて、イエス・キリストと女だけが残されました。イエス・キリストは「だれもあなたを罪に定めなかつたのか」と問います。すると女は、「主よ、だれも」と答えます。そしてイエス・キリストも、「わ

たしもあなたを罪に定めない」と答えられます。姦淫は律法の決まりでは石打ちの死刑です。けれども彼女はその決まりを超えた広い心によって、赦され救われました。これが「広い心」という意味です。そのような広い心を持ちなさいと言っています。

そして、パウロは続けて、「主がすぐ近くにおられます」と語ります。「主において喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。」フイリピ書は美しい文章で綴られています。「主は近い」という言葉がこれらの美しい文章を生み出す鍵になっています。主が近いので教会内での不和があつてはなりません。主が近いので常に喜びなさい、広い心を示し、思い煩うな。これがパウロの信仰の勧めであります。

パウロの時代のクリスチャンたちは、「マラナタ」「主イエスよ来たりませ」が口癖の言葉でありました。歴史の終わりにイエス・キリストは再び来られて最後の裁きをされる。彼らは、主の再臨は近いという終末信仰をリアルに持つて生きていたのです。この終末信仰からパウロの具体的な勧めが出ています。イエス・キリストの再臨による歴史の終わりという終末信仰はこの世の知恵からすれば全く愚かです。「まあそういう信仰もあつてもよいでしょう」というくらいのもではないでしょうか。けれども、私は最近特に、この終末信仰について思わされます。先々週、パウロのロマ書十三章の「救いは近づいている」という言葉から終末信仰について申し上げました。わたしたちが生きているこの時代、あらゆる面において希望が持てない、わたしたちの罪が生み出す暗黒は、世界中を覆っています。けれども、だからこそ終末信仰だと私は思っています。大変好きなお話ですからしばしば申し上げます。十九世紀にドイツにブルムハルトという牧師がおられました。このブルムハルトは牧師館の庭に一台の馬車を用意していました。人々は「この馬車は何ですか」と問いますと、ブルムハルトは「主イエス・キリストが再臨された時にこの馬車に乗って、主のもとに駆けつけるための馬車です」と答えたそうです。人々は当然、馬車と終末信仰を愚かと言つて笑いました。けれども、ブルムハルトは、「福音の光と人間の現実の闇とを思う時、どうして終末を待望する信仰を断念できるだろうか」、「人間の罪の現実を思う時に終末を望む信仰を持たずしてどうして今を生きられますか」と反論したと言われています。ブルムハルトはその終末信仰を見える形で人々に示したのです。私は今の時代の暗さの中でブルムハルトの信仰を思います。主イエスの再臨によって歴史

の終わりがあある、これを望むがゆえに今を希望に向かって生きられるのではないでしょうか。パウロは、主は近い、だから、不和から同じ思いを抱きなさい。悲しみはたくさんあるけれども、常に喜ぼう。競い合う心で、ギスギスと決まりと正義を振りかざすけれども、それらを超えた心を示そう、考えればいくらでも心配事があるけれども、思い煩わない。そのように神に向かって突き抜けた信仰があると語ります。主イエスによる再臨の喜びの日がすぐ近くに来ているという終末信仰については最後にもう一度お話ししたいと思います。

パウロはここから祈ることを勧めます。「何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」心の中にはいろいろな思い煩いがあります。けれども、その心の中のすべてを神に打ち明ける。それは全ての願い、求めているもの、何でもすべてを神に明け渡す祈りです。祈りは神さまに向かって訴えて、心を空っぽにすることで、心が空っぽになったところへ人知を超える神の平和が与えられ、わたしたちの心と考えとをキリスト・イエスにあつて守られる。平和の神から神の平和が与えられると言っています。この「平和」はギリシャ語では、「エイレネー」、ヘブライ語では「シャローム」です。「シャローム」はユダヤ人が何よりも求めていたものです。シャロームとは深い平安と大きな喜びに満ちる平和であります。すべての祈りと、願いと、求めを感謝をもって神に打ち明けなさい。心を空っぽにする神の平和、真の平安と喜びに満ちた平和が心の中を満たしてくれる。キリスト・イエスにあつてそのような祝福に与えることができるかと祈ることを勧めています。祈りこそが神の平和を満たしてくれるものだからです。

このように語った後、パウロは終わりの勧めを語っています。八節から九節までをご覧ください。「終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名譽なこと、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。ここに挙げられている真実、気高い、正しい、清い、愛すべきこと、名譽、徳や称賛、これらの言葉はギリシヤ語特有の意味が込められているそうです。それはそうでしょう。日本人が考えるこれらの徳目と当時のギリシヤ人が示す徳目とはその意味合いが多少違うかも

しません。けれども、注解者たちはこの徳目はギリシャの文献でも共通に見られるもので、パウロはクリスチャン特有の徳目とは考えずに時代の人々の徳目を尊重しなさいという意味合いで語っていると注解しています。ですから、わたしたちは目くじらを立ててこの徳目を事細かに吟味する必要はないと思います。人々が真実や愛や徳として認めているものに心を留めなさいと言っているわけです。そこからパウロは力をこめてこう言います。「わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。」人々が徳目と言われているものには心を留めなさい、気をつけて注目しなさい。けれども、わたしから学びを受け、聞き知ったことはそのまま実行しなさいと言っています。パウロはフィリピ書の三章一七節でこう語っています。「兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。」「わたしに倣う者となりなさい」と言っていますが、私も一生に一度くらい、こういうセリフを言ってみたいと思います。けれども、そういうことはまずないでしょう。パウロは、わたしに倣え、そしてわたしから学んだことを実行せよ、そうすれば平和の神があなたがたと共におられる、シャロームの神があなたがたをしつかりと包み込んでくださると力強く語っています。

最後にもう一度、「主はすぐ近くにおられます」という終末信仰について申し上げたいと思います。主イエスの再臨による歴史の終わり、最後の裁きに対する信仰は人間の理性では愚かであります。考えられないことです。けれども、この信仰はわたしたちが今を生きる力です。パウロは「主は近い、だから仲直りをしなさい」、「主は近い、だから喜び、広い心を示し、思い煩うな」、「主は近い、だから心のすべてを神に打ち明けよ、そうすれば神の平和があなたがたの心を支配する」、そして「主は近い、だから真実や愛や徳に心を留めよ」と語り、最後に「主は近い、だからわたしから学んだことを実行しなさい」と訴えているのです。

パウロから学んだこととは何か。それはイエス・キリストの十字架と復活によってわたしたちのすべてが赦され、生きよと神さまに是認されているということなのです。この神からの是認は隣人を自分のように愛しなさいという律法を全うしてゆきます。神の是認に根拠を置くから共に愛し合って生きるということが始まっていくわけです。これがパウロから学んだ福音です。主は近いということが始まると明日に望みをおくゆえに今の状況に絶望しないで、しつかりと愛に向かって今を責任的に生きるのです。ある方は、終末信仰は大地に対して忠実であれという信仰であると言っています。終末信仰は生きている現実に責任を負うということ

す。そのような今を生きる力、それが終末信仰なのです。私は今日与えられた御言葉から、このことを深く覚えてゆきたいと示されました。

さて、来週、わたしたちはいよいよクリスマス礼拝を迎えます。イエス・キリストのご降誕を共に喜んで、心からお迎えしたいと思えます。イエス・キリストに神からの愛と慈しみ、そして暗黒を照らす真の光があるからであります。この愛と光を、来週一緒に受け止めてクリスマスマス礼拝を捧げたいと思います。今日、与えられた御言葉は「主において喜びなさい」です。